

# サステイナブル縄文展 ガイド

## サステイナブル (sustainable) とは？

持続可能であること、とくに環境破壊をせずに維持、継続できるという意味の英語。1987年に国連「環境と開発に関する世界委員会 (WCED: World Commission on Environment and Development)」が公表した報告書「われら共有の未来 Our Common Future」の中心的な考え方として、持続可能な開発 sustainable development という概念が提唱された。これが世界から広く支持されたため、一般的な環境用語として使われるようになった。一般には、

- ・サステイナブルエコノミー sustainable economy (環境保全に配慮した持続可能な経済)、
- ・サステイナブルシティ sustainable city (環境への影響に配慮した都市づくり)、
- ・サステイナブルモビリティ sustainable mobility (環境にやさしい車社会)

などというように、環境や資源に配慮したという意味をつけ加える単語として使われている。将来のための地球環境の保全、未来の子孫の利益を損なわないことを前提にした社会発展、などといった視点が、従来の環境問題への取り組みと比べて斬新なことから、さまざまな分野に広がっている。

[コトバンクより引用]

## 縄文の持続性

縄文時代とは、約1万5000年前から約2300年前にかけての時代で、狩猟採集社会といわれています。そのため、縄文人はいつも食べ物を求め、不安定な生活を営んでいたイメージをもたれますが、実は、最近の研究では同じ遺跡に、1000年から1400年もの間、人が住み続けたことがわかりました。それに比べて、縄文時代の後の、水田耕作を特徴とする弥生時代の遺跡は、せいぜい数百年しか続いていません。なぜ、狩猟採集社会の縄文人の方が、同じ場所に長期間居住し続けることができたのか。

このテーマを解く手がかりは、縄文人たちの食料にありました。最近の研究では、彼らは動物、魚、貝、ドングリなどをバランス良く食べていて、その中でもドングリなど植物が主食だったことがわかりました。ドングリは殻を割り、土器で煮てアクを抜き、団子のような塊にして食べたり貯蔵していたりしていたこともわかりました。多様な文様や形の縄文土器はそれらの加工具だったのです。狩猟よりも、森の資源に強く依存し、それを加工や貯蔵する食文化を作りあげたことが、長期的な社会を形成するひとつの基盤になっていたことがわかってきたのです。

人骨を調べると、内陸地域の人も沿岸の地域の人も、森の資源である動物やドングリなどの植物、海の資源である魚や貝をバランス良く食べている人が多いこともわかっています。また、海から何キロも離れている遺跡から海の貝殻が大量に出てくるというケースもあります。こうした事実から縄文人は、それぞれの集落の役割を地域で上手く使いこなし、人の交流や物の流通を頻繁に行っていたことが、特定の集落に人口の一局集中による資源の枯渇防止にもつながり、それが長期的な社会を構築する基盤になっていたと考えられるのです。この縄文社会の構造は、現代社会が目指そうとしている持続可能性社会を構築するヒントになります。また、縄文人たちの地域間の相互関係は、私たちが生きる社会の基盤にある貨幣経済の根幹となる等価交換のような仕組みでは説明できません。

縄文時代は、特定の産地の物資が、真綿に水が染みこむように、流通しているのです。信頼や親ほくが社会を支える仕組みであったのかもしれませんが。それは貨幣経済に内在する今日的な課題を抱えて生きる私たち現代人にとって、決して原始的で野蛮な制度であったと評価することもできないでしょう。

[meiji.netより抜粋引用]

## 縄文の赤、黒、白

縄文式土器には色付けしたものが複数出土しています。それらの色は殆ど赤と黒です。一説によると赤は血(=生命)を表し、黒は死(=血が固まった色)を表すともいわれています。また、福島県や宮城県では縄文中期の土器に稀に白色のものが見られます。白色の動物は突然変異体(アルビノ)ですが、これらは日本では白蛇のように一般的に神聖化されており、そこから推測すると白色土器は神様を表すのではないかと考えられます。ではそれはどんな神様なのか? は、↓をご覧ください。

〔縄紋文化研究会〕

## 壺形土器と前方後円墳

古代中国の神仙思想には壺の中に仙人が住み、その仙人が不老長寿をもたらすとの伝説があるそうです。前方後円墳は鍵穴のような形をしています。それを逆さまにすると壺の形になります。不老長寿を祈り、不老不死の壺の形を写した墳丘墓に偉人を埋葬し祭るといった当時の宗教心が推測できます。涌谷町の城山公園史料館に展示されている長根貝塚出土の白い縄文土器も前方後円墳の様な形をしています。もしかしたら、中国の神仙思想は日本の白い縄文土器に住んでいる不老長寿の仙人を求めてのものかも知れません。紀元前約三世紀頃の秦の始皇帝の時代に不老長寿の靈薬を探し求めた斉の方士・徐福が日本を目指して旅に出たとの伝説も、ひょっとしたらこの白い壺形土器の仙人を求めてのものだったのでしょうか? 土器作りからこんな仮説も生まれできます。

〔縄紋文化研究会〕

## 縄文の音

縄文時代の楽器として確定した遺物は諸説ありますが、鈴、笛、太鼓があったのでは? との可能性が語られています。こうした楽器(と思われる土製品)で縄文人はどんな曲を演奏したのでしょうか? 想像が尽きません。

●太鼓: 有孔鏝付土器(ゆうこうつばつきどぎ)は平らな口縁とその直下に規則的に穿たれた穴、及び穴の下方に鏝(隆起帯)を持つことを特徴とする縄文土器です。この土器の用途としては酒作り器説と太鼓説の二つが仮説として主流です。縄紋文化研究会では太鼓説を支持し、様々な縄文太鼓を作成しております。

●鈴: 縄文遺跡から発掘された遺物には鈴を想定されるものも出土していますが、現在の鈴の様に割れ目は無く、鳴り子の玉も複数入ったものが発掘されています。また、土偶の中に鳴り子を入れた音の出る土偶も発掘されています。

●笛: 中空で1~3個の穴が穿たれた土製品が縄文時代の遺跡から稀に出土します。特定の動物型意匠を伴っていないものは土笛、動物型意匠のものは動物型土製品または亀形土製品として分類されているようです。亀形土製品は土偶の一種であり穿たれた穴は焼成時の空気を逃がすためのものとの説もありますが、複製した亀形土製品は吹き口と音階調整用の穴が土笛として演奏する場合に、都合良く適合した位置に穿たれており、人間が使用することを前提とした場合には笛としての用途の可能性が高いのではないかと考えられます。

〔縄紋文化研究会〕

## 縄文人の数の概念

縄文人は数の概念を持っていたとの証拠になる土版が秋田県大湯環状列石遺跡から出土しています。通称「縄文のどーも君」と呼ばれるこの土版には表面に1~5、裏面に3+3=6の穴が人型を構成する様に穿たれています。

この土版には口から下側部に穴が通じているらしく、数を表す土版だけでなく土笛の機能も備わっているようです。今回複製した「縄文どーも君」も何とか土笛として鳴らせるようです。購入された方は試してみてくださいね。

〔縄紋文化研究会〕

